法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

ドストイエフスキーとペトラシェフスキー--ペトラシェフスキー事件(1)

近田，友一

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要 / 法政大学教養部紀要
(巻 / Volume)
15
(開始ページ / Start Page)
21
(終了ページ / End Page)
34
(発行年 / Year)
1971-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005206

Hosei University Repository

ドストイェフスキーとペトラシェフスキー

――ペトラシェフスキー事件（I）――

近田友一

ドストイェフスキーのペトラシェフスキー事件への係り方は、事件そのものの単純さに比して、極めて複雑な性格をおびている。この係り方の複雑さは、いわば、ドストイェフスキーの全生活がこめられている複雑さであり、難しさであると言える。ドストイェフスキー自身のこの事件に対する後年の曖昧な態度も問題の核心をはぐらかすに充分であり、意識的誇張的な言辞も問題の解明を難しくしている。おそらく、ドストイェフスキーの姿勢は、明確な結論を引出す可能性を拒絶していると言ってもよいであろう――それは、結論が明晰であればあるほど解析の杜撰さが証明されるというような逆説的な関係をもつ。このドストイェフスキーの姿勢の中にある本質的な曖昧さは当時の彼の生活そのものの曖昧さであり、その分析の困難さはドストイェフスキーの生活そのものの分析の困難さに他ならない。

かかる微妙な条件の中でわれわれの選ぶべき唯一の方法は事実の忠実な追究以外にはないであろう。

「五つの絞首台と苦役と白い革紐、そして空色の制服を着たベンゲンドルフとを引き具して登場した」(1) ニコライ一

Hosei University Repository

世の宰領するるロシアも四十年[2]代にはその圧制に比例して無気味な抵抗感が伝ってくるような微妙な段階に入っていた。

「ドイツ哲学の周期」を卒えたインテリゲンチャにとってもはや〝絶対〟や〝無限〟の論議に満たされざるロマンチシズムの夢を託し、〝永遠の美〟の討議に青春の情熱を紛らしていた「従順な」時代はすでに過去のものとなった――彼等には再びデカブリスト（十二月党員）のアイディアリズムが蘇り、現実と隔絶し純粋な観念の世界に逃避していた自己の姿勢に批判的な眼を向けるような余地が出来ていたのである。彼等は与えられた条件下で最大の「自由」の可能性を探求した。かくて、アレクサンドル一世の治世の末期に端を発した秘密結社という形式がこの頃になると再び勢いを取戻し、発達し始めたのである。ペトラシェフスキーの金曜会も「空色の軍服」の下で最大の「自由」を確保する必要から生れたかかる組織の一つに他ならなかった――偶々ドストイェフスキーという歴史的人物が紛れこんでいたためにその本質的な意味以上に高名になったが、ペトラシェフスキー会のような形態は、当時のロシアでは必然的であると同時に普遍的な現象にすぎなかったのである。

大蔵省を退職した青年ペトラシェフスキーが自分のところへ人を集め始めたのは四五年末のことで、ヴォルテールの哲学辞典式の体裁とラムネエの『信者の言葉』流の内容をもった『ポケット外来語辞典』第一巻の「公然たる」秘密出版の成功に気をよくしていた直後であった。この四十年代の若いインテリゲンチャにとって必然的な要求であると同時に、また、一種の精神的アクセサリーでもあった「サークル」には金曜日毎に十人前後のフーリエストが集ってニコライの秘密委員会が検討しているテーマと同じ問題――農奴の解放について論議をかわし、ニコライの大臣達が作成している計画案と同様なプラン――裁判制度の改革をめぐって意見を交換した。しかし、この社会意識に目覚めた「ヘーゲリアン」の討論も、主観的には委員や大臣達のそれ以上の真剣さをもっていたにせよ、客観的にみればそれは極め

Hosei University Repository

てロシア的な、イヴァンの言う「くちばしの黄色い連中のおしゃべり」の域を出なかったと言えるであろう。資本主義の発達と農奴制の危機を熟知し、既存の社会体制の維持という現実的地盤の上に立って歴史的潮流に対処しようとしたニコライの方策にはドン・キホーテ的な強引さはあるが幻想はない――この専制君主中でも指折りのリアリストの眼は過渡期のロシアの苦渋にみちた現実から少しもそらされてはいない。そこには確信にみちた保守主義者の愚直な解決への希求がある。この愚直さが何よりも「サークル」には欠けていた。彼等はすべての緊急な問題をロシア独特なロマンチシズムの上に横たえたのである。サルトゥイコフ＝シチェドリンは「フランスからそれもルイ・フィリップやギゾーのフランスからではなく、サン・シモン、カベー、フーリエやルイ・ブランのフランスから人類に対する信仰が我々の中に注入された」と言っているが、この〝黄金時代〟的な信仰がロシア流に飜訳され、ロマンチックな響きを伴った言葉となって多感な青年達に迫る時、「愚直さ」に通う何物もそこにはない――それは決して現実の農奴解放問題にも裁判制度改革問題にも結びつかないものだ。彼等にはデカブリスト以上の聡明さがある代りに、デカブリストが持っていた程度の現実性にも欠けていた――デカブリストのロマンチシズム、アイディアリズムは彼等の頭脳の中でのみ蘇ったが、現実的な行為に結びつく契機は何一つとして見出せなかったのである。それは歴史的にみれば、専制政治への抵抗のプロセスが未だプリミチヴな段階にあったと考えられるが、主体的にみれば、当時の最高最新の思想であった空想的社会主義の体系とロシアの現実の諸問題との落差が〝行動〟に思い至らないほど青年達を幻惑したとも言えるであろう。空想的社会主義者の「整然たる」思想は、彼等の自尊心、気取り、情熱に相応な満足を与えたが、「行為」を夢想させる程度の現実性もそなえてはいなかった。美的な共感すらそそるフーリエやカベーの思想体系は、いわば、現実のロシアには荷が勝ちすぎていたのだ。青年達は何ら結合点のない思想と問題を平面的に並べ、結論のない議論に酔っていた――彼等の性急な熱した頭の中で「ロシア人」と「人類」が混淆し、農奴

Hosei University Repository

制や家族制度の問題が「ファランステール」や「イカリヤ共和国」の幻想と重なったのである。この脂ローソクと紫煙の中の議論には真剣さと現実性が反比例するというパラドキシカルな関係が絶えずつきまとっていたが、彼等の陶酔はこうした「論理」の認識を全く必要としなかった。そこには歴史的にも主体的にも――ロシア社会主義の展開の面においても会員の精神の面においても――若年期の特徴が看取される。

ドストイェフスキーがこの「サークル」に出入し始めたのは四六年冬から四七年と推定されているが（E・カー）、彼をペトラシェフスキーに紹介したといわれるヴァレリアン・マイコフ及びその弟アポロンと知り合ったのは四六年秋頃とみられるからこの推定にさして無理はないであろう。しかし、単純な伝記的事実に比して、ドストイェフスキーとペトラシェフスキーの結びつきの契機には極めてデリケートな事情が介在している。ペトラシェフスキー事件とドストイェフスキーとの関係はまずこの点から問題にされなければならない。

ドストイェフスキーがペトラシェフスキー個人について語っているのは供述書の中だけであるが、この供述にはカーの皮肉な表現に従えば、「ペトラシェフスキーとの関係を小さなものにしようとする不誠実な努力」があって正確に近いところを探り出すのは至難のわざである。しかし、言ってみれば、供述書という特殊な条件下で書かれた文書から〝正確に近いところ〟を探ろうとすること自体すでに虫がよすぎる話で、むしろ「不誠実な努力」を咎める方がどうかしていると言えないこともないのだが、また、注意して読んでみると、逆にラスコーリニコフ的な挑戦的な言辞から〝真実めいたもの〟が閃いているのが感じられないこともないのである。要は、この供述をよむ人間のポルフィーリー的な勘ということになりかねない……例えば、かなり戒心しながらではあるがドストイェフスキーはペトラシェフスキーとの交わりをめぐって二、三興味ある見解を述べている。

「私は金曜日毎にペトラシェフスキーのところへ出掛けはしたけれど彼と極めて親しい関係にあったというわけでは

Hosei University Repository

決してない。ただ、彼が順序として訪問を返したにすぎないのである。それは性格の点でも、いろいろな考え方の点でもペトラシェフスキーと似ていない私が余り尊重していない交友関係の一つなのである。」（「ドストイェフスキーの供述」[3]・傍点引用者）

ドストイェフスキーとペトラシェフスキーとの〝次元〟を異にした人間の交遊の動機については次のように記されている。

「ペトラシェフスキーの少なからぬ奇行と奇妙な性癖はつねに私を驚かした。我々の交遊さえ彼が最初からその奇妙さで私の好奇心を刺激したことに始まるのだ。（中略）我々は決してお互に親しい友ではなかった。我々の交遊の間中二人・・・だけで面と向って半時間以上も対していたことは皆無だったと思う。彼が私のところへ出掛けてはくるものの丁度それは儀礼を果しているといった感じであり、例えば、私との長時間の会話が彼には気が重いことを私ははっきり気付きさえしたのだ。私にしても同様であった。何故なら繰返して言うが、我々の間には考え方の点でも性格の点でも類似したところが殆どなかったからである。我々二人はお互に長話を差控えた。というのは、二人共すぐ争論を始めるし、それにはお互にあきあきしていたからである。双方ともお互の印象は同様であるように私には思われる。自分が頻繁に、金曜日毎に彼の許を訪れたのは彼のためとか、金曜会そのもののためであるとかいうよりも、むしろ、私が好意をいだき相識でいながら会う機会の稀な人達と顔をあわせたいがためなのだ、ということを少くとも私は承知している。とはいえ、私はつねにペトラシェフスキーを誠実な高潔な人間として尊敬していた。」（同前・傍点引用者）

Hosei University Repository

カーの推定に従って二人の交友関係の成立を一応四六年冬としてみると、逮捕までに足かけ三年位の歳月があるが、この間の彼のペトラシェフスキー観の変化を無視することは出来ない。おそらく、この供述の中には本能的な防禦の姿勢と同時に、ペトラシェフスキーに対する最初の率直な印象とは異った、いわば、結論的な感想めいたものが語られているのである。この時間的な推移のある感想の混淆がドストイェフスキーとペトラシェフスキーの交遊の最初の動機を曖昧にしていると考えられる。しかしながら、この微妙な内容を含んだ供述からも注目に価する二つの事実が察せられる——ペトラシェフスキーへの接近の偶然性及びペトラシェフスキー個人から「サークル」自体の雰囲気への関心の推移である。

ドストイェフスキーがペトラシェフスキーへの接近のモメントを「好奇心を刺激した」というような表現で説明したことはかなり意味深い。ペトラシェフスキーとの交友関係の成立には、ドストイェフスキーの内面的必然性、精神的共感というような純粋な「思想」的方面での結びつきよりも、外的な偶然的なエレメントの占める役割の方がはるかにつよいのである。ペトラシェフスキーに対する興味から「サークル」への関心の移行もこの結びつきの外面的な性格に由来するのであるが、このような事実を分析するためには交友関係成立当時のドストイェフスキーの生活からみてゆくことが必要であろう。

ドストイェフスキーが『分身』を執筆していた当時、かなりの程度の神経症に悩まされていたことはよく知られているが、『分身』の「失敗」が決定的となってからはそれ迄以上のヒポコンデリーに陥ったらしい。四六年四月一日付兄ミハイル宛書簡。

「ぼく自身はどうかというと、暫くの間は意気悄沈してしまった位です。ぼくには恐ろしい欠点があります——方

Hosei University Repository

の知れない自尊心と名誉心です。ぼくは期待を裏切った、傑作となり得べきものを台無しにしてしまったというおもいがひどくぼくを悲しませました。（中略）つまり、こういったことが一時ぼくの地獄となって悲しみのあまり病気になった程です。」

『貧しき人々』の過度の賞讃と『分身』の予想外の不評との振幅の大きさが、この人並はずれた自尊心と鋭敏な神経をもった青年に耐えきれなかったのは自明の理である。「限りない尊敬と大変な好奇心」(4)の渦中にいると信じていた新進作家には、処女作の「十倍以上の傑作」と自負していた作品の不評が何としても納得出来なかったのだ。だが、ドストイェフスキーの滑稽な程の自負心もさることながら、その責任の一半は『分身』に対するベリンスキーの態度の曖昧さにもあったといえる。グリゴローヴィッチ、アンネンコフの回想及びこの間の消息に触れたドストイェフスキー自身の兄宛の書簡などを綜合してみると、作品の一種不可思議な難解さに当惑を覚えながらもベリンスキーが最初『分身』をかなりの程度褒めあげたことは事実らしい。「これ程微妙な心理を探求し得るのは只ドストイェフスキーのみ」とか「『死せる魂』以来の傑作」などというような一派の満更でもない評言を耳にしていただけに、ドストイェフスキーには、やや自己を取戻した『ペテルブルク文集』の批評家の言葉が不可解だったし、気にくわなかったのだ。過剰な自尊心に悩まされつづけていた〝心理家〟が自己の現在の立場を独自な想像力を駆使して分析しない筈はない――ベリンスキー一派の連中が彼に嫉妬しているようにおもえてきたのは至極当然であろう。客観的事実も彼の分析の正確さを裏づけた――彼等の揶揄的な態度をドストイェフスキーは『分身』の不評と結びつけずにはおかなかった。実際には、かような心理操作を必要とする彼の精神構造が退屈しきっていた連中の悪戯心を誘ったにすぎないのだが、ドストイェフスキーには自分の「結論」の妥当性を疑う余裕は失われていたのである。パナーエヴァ夫人

Hosei University Repository

やグリゴローヴィッチの回想などをみてもドストイェフスキーが自ら彼等の罠に飛込んでしまったような感が深い。パナーエヴァは「意地の悪い、しつっこく人を困らせる人」とか「誰彼の見境もなく議論をふっかけてただもう強情に相手に逆らう男」というような評語をドストイェフスキーに与えているが、彼女のツルゲーネフあたりへの好意を幾分割引きして考えても、ドストイェフスキー自身に人々の嘲弄を誘うような可愛げのなさがあったことも事実だろうし、弱点を意識しながら誇張する自らももてあました鼻持ならない性格の中には、余りにもアリストクラートであったツルゲーネフなどとは生理的に反撥するところがあったのであろう。

しかし、その動機が何であれ、この悪戯の頭目が「立派な躾で練り上げられた」「申分のない美しい性格」[5]の持主であったツルゲーネフであり、ドストイェフスキーをベリンスキーに引合わせてくれたネクラーソフであった事実は――ドストイェフスキーが最大の好意をいだいていた人達であったことは、彼の失望と怒りを一層はげしいものにし、ドストイェフスキーには文学者は「みんな卑劣なやっかみや」[6]にみえてきたのである。外界から隔絶された閉鎖的な家庭の中で育ち、孤独な工兵学校生活を卒えた傲岸な自意識家ドストイェフスキーには、社交術は余りにも難解なものであり、文壇での交際は手にあまるものであった。

ベリンスキーがクラエフスキーと喧嘩別れをして『祖国の記録』を去ったというような偶然な外的な事情もすでにクラエフスキーのお雇い文士になっていたドストイェフスキーの立場を一層耐え難いものにした――潜在していた二人の分裂の危機はこの偶発的な出来事を媒介として全く表面化したのである。四六年十月七日付の兄宛の手紙などからみると、この頃のドストイェフスキーの生活は『虐げられし人々』の青年作家ヴァーニャの述懐に殆ど一致する。自己の才能への不信、不断の神経症の発作、肉体の衰弱――「生命までもが掌中に握られている」クラエフスキーからの前借と注文仕事の義務を果すことだけがこの孤独な青年作家の唯一の生活感覚であった。

Hosei University Repository

このような当時のドストイェフスキーの生活を考慮に入れてみると、彼とペトラシェフスキーとの結びつきはドストイェフスキー自身供述書でのべている如く、案外簡単な、偶然的外面的なものであったかも知れない――ベリンスキー一派との不和で文字通り隙の生じたドストイェフスキーの心に、ベケートフ兄弟、マイコフ兄弟、プレシチェーエフなどと一緒にペトラシェフスキーも隙間風のように入りこんで来たのであろう。

四六年以来ドストイェフスキーの主治医であり、親友であったヤノフスキーは次のような推測を下している。

「フョードル・ミハイロヴィッチは集いが大変好きだった。或は、もっと正確に言えば、何かしら知的発展を渇望する若者達の集まりが好きだった。（中略）一方では、社会への、知的活動への愛、他方では「工兵学校を卒えてから彼が暮していた社会以外の社会での知人の不足が、彼をして容易にペトラシェフスキーと親密ならしめた原因であろう。」（「ヤノフスキーの回想」）(8)

この善良な医師にはこれ以上の解釈は不可能だったのであろうが、思想的な面でのペトラシェフスキーへの接近の強調を意識的に避けていることはやはり注意しなければなるまい。確かに、最初からドストイェフスキーに内心の深い要求があったとみるのはやはり冒険であり、「ろくでなし」の文学者への嫌悪感の反動が異質の人間へ彼を接近させた最大の契機であったと考える方が至当であろう。

マイヤー＝グレーフは、「詩人はその政治的衝動よりもロマンチックな感情でペトラシェフスキーに近づいたのだ。」(9)と述べているが、彼がペトラシェフスキーと近づきになった最初の動機にはむしろ現実的な散文的な要素の方がつよいのである。マイヤー＝グレーフの指摘したロマンチックな要素は、時間的にははるかに遅れて意味をもち、表面化

Hosei University Repository

してきたのだ。

ペトラシェフスキーとの結びつきの単純さ、偶然性は、ペトラシェフスキー個人に向けられた好奇心が短期間に「サークル」自体への関心に移っていったことによっても逆に証明される。供述書ではドストイェフスキーは、金曜会への頻繁な出席の目的を「好感をもちながら会うことの稀な」友人との交遊に機会を与えてくれるからだと説明しているが、この「友人」とは「サークル」の雰囲気に他なるまい――しいて友人と言うならば、それはこの雰囲気を醸成する複数的な、一般的な、いわば、普通名詞化された「友人」なのであろう。この頃ドストイェフスキーが必要としたものは「卑劣なやっかみや」の文学者とは肌のちがった人間であった。最初「奇妙な性癖をもった」ペトラシェフスキーが彼の心とらえ、次にはそのサークルの雰囲気がペトラシェフスキー以上に彼の慰めとなった――ドストイェフスキーには何よりも気のおけない、つき合いやすい人達のサークルの居心地のよさが気に入ったのである。当時のドストイェフスキーを動かしていたものは、単なる対人関係の調整への希求ではない。彼にはそれ以上に集団への自己埋没による自己自身からの脱却の願望があった。「ファランステール」や「イカリヤ共和国」が自己の精神的疲労感をも肉体的虚脱感をも救うに足りないことをドストイェフスキーは熟知していた。しかし、彼にとっては議論そのものよりも議論することのうちに一層深い意味があったのであろう。

かかる観点からすれば、ドストイェフスキーの金曜会における最初の姿勢には多分に逃避的な傾向があったと言える。この彼のネガチヴな姿勢は、換言すれば、交友関係の破綻を契機として彼の一切のコンプレックスから生れた絶望感がドストイェフスキーを金曜会へ駆り立てたという事実は、ペトラシェフスキー事件におけるドストイェフスキーの位置を決定する上に看過出来ない一点である。このことは特に記憶に留めておく必要がある。

この逃避的な姿勢の上に漸次ポジティヴな方向が重なってくる――会員の議論のうちに彼が感じ始めた関心は、当

Hosei University Repository

時のドストイェフスキーにとってはやはり本質的なものである。「サークル」への加入のモメントが多分に偶然的外面的な要素と逃避的な傾向を含んだものであるにせよ、この時代のドストイェフスキーが彼なりの「ユートピア」思想をいだき、アイディアリスティックな夢想の中に呼吸していたことも、また、否定出来ない事実であろう。この彼の逃避的な方向と重なったポジティヴな方向――希望的な姿勢を分析するためには、『貧しき人々』から『白夜』に至るまでの彼の作品のいくつかが重要な役割を演じるであろう。

ドストイェフスキーの初期の主要な作品を大別すると、『貧しき人々』『弱い心』の線と、『白夜』、『主婦』の線の二線によって構成される図式が成立するであろう(『分身』は心理的には後者に属し、作者の姿勢は前者に近い――いわば、中間的な存在である)。前者には作者のヒューマニスティックな立場が明確な形で表面化されており、後者ではこれを支える彼の「空想主義(メチターチェリストヴォー)」が重要な位置を占めている。ドストイェフスキーのアイディアリズム――ポジティヴな姿勢は、図式的にみれば、この『貧しき人々』の〝外向的〟な線と『白夜』の〝内向的〟な線の交叉点上に位置すると言えるであろうが、本質的には前者は後者の表現形態であり、後者の分析はそのまま前者の解明につながる。従って、金曜会におけるドストイェフスキーのポジティヴな姿勢の位置づけは、彼の空想主義――空想家の精神的内容の解明によって果されるであろう。要するに、空想家のポートレートを描くことが必要なのである。

空想家の境位を決定しているものは〝孤独〟である――彼の生活、彼の精神活動もすべてここから始まる。

「彼等は主として、寄りつくことも出来ないような片隅で深い孤独のなかに住んでいる。それは、さながら人間からも世の中からも隠れようとしているかのようだ。」(『ペテルブルク年代記』)。

他の空想家――『白夜』の主人公はこの孤独を亀の生活にたとえ、オルディノフは野の獣の生活と比較する。それは「もう一つ別の生活があることなど暫くの間は頭に浮ばない」[10]ような生活である。だが、この孤独は惰性化した孤

Hosei University Repository

独ではない――そこにはノーマルな人間の想像も及ばない程の緊張した精神によって支えられた一刻一刻の生活がある。彼等の自己沈潜は自己の境位の認識と比例して深化してゆく――孤独の意識が一層孤独をつのらせ、白熱した精神の緊張を無限に継続させてゆくのである。この孤独から彼等の熱病じみた空想が生れる――それは行動への渇望のシノニムに他ならない。自己への沈潜が行動へのファナティックな希求をよび、せめて空想の中なりとも「直接的な生活」[11]に参与しようとする。ペレヴェルゼフは、「現実は苦しく、現実は不可解である。で、現実から幻想の世界へのがれる。(中略)孤独は空想家の変ることなき伴侶である。自己の幻の観察にふけって人間はすべて周囲のものを忘れ、ファンタスティックな形象の他は何物も眼にせず、耳にもしない。現実が彼に自己を思い出させる時、彼は苛立ち、現実を忌々しく思う。」[12]と書いているが、ドストイェフスキーの空想家の特徴は、ペレヴェルゼフの指摘とは異って、〝現実的〟な行動への渇望をいだいているところにある。彼等は空想家であるが故に孤独家なのではなく、孤独家なるが故に空想家なのだ。ドストイェフスキーは「空想家」というタイプの中に自己への沈潜と行動への渇望という二律背反を見出してこれを示しているのであるが、彼の力点が前者の意味の上にではなく、後者の説明の上におかれていることは留意しておかなければならない。空想家の本質はこう記されている。

「行動に対する渇望は我々の間で何か熱病じみる程抑えきれないような焦燥に達するまでに立ち到っている。誰も彼もが真剣な仕事を望んでいる。おおくの者が善を行いたい、世に益をもたらしたいという燃えるような願望をいだいている。」(『ペテルブルク年代記』・傍点引用者)

それは閉鎖的なエゴイスティックなものであるというよりも、一般人類的な、極めてアイディアリスティックな

Hosei University Repository

要素をもった資質なのである。

ドストイェフスキーにあっては佗しい孤独な片隅での生活と幻想的ともいえるような熱烈な理想主義が決して矛盾しなかった。『白夜』の主人公は、「この（空想家の）生活は何かしら幻想的な熱烈に理想主義的なものと色褪せた散文的なありふれたものとの混合なのです。」と述べているが、「色褪せた散文的な」生活が逆にアイディアリスティックなものへの憧憬をつよめたと言えるのである。

『貧しき人々』においては、この彼のアイディアリズムは救いのない人々の生活をリアリスティックに描き出すことによって逆説的にあらわされたが、『ペテルブルク年代記』や『白夜』のそれは、〝空想主義〟という、いわば、その「本源的な」形の中で一層直截に語られている。「社会の不公正」を消失させて世界を調和あるものに高めようとする『貧しき人々』の作者のヒューマニスティックな眼とこの空想家のアイディアリスティックな眼は、金曜会におけるドストイェフスキーのポジティヴな姿勢の上で一致する。この姿勢もドストイェフスキーと事件との位置を決定する重要なエレメントである。

約言すれば、さきのネガティヴな、逃避的な姿勢と、このポジティヴな希望的な姿勢との逆説的な交叉が金曜会におけるドストイェフスキーの根本的な本質的な姿勢を形成しているのである。この二律背反的な、複合的な姿勢はスペシネフとの関係において一層深化した形をとってあらわれてくるのであるが、両人の関係を考察するためには、まずドーロフのサークルの周辺からみて行かなければならない。（未完）

（1）　A・ゲルツェン『過去と思索』（一八五二）

（2）　一八四〇年

Hosei University Repository

(3) T・ヴェトリンスキー編『同時代人の回想するドストイェフスキー——手紙と覚書』(一九一二)
(4) 兄ミハイル宛四五年十一月一六日付書簡
(5) 同前
(6) 同四六年十一月二六日付書簡
(7) 同四六年四月二六日付書簡
(8) (3)と同書
(9) J・マイヤー＝グレーフ『ドストエフスキー・人と作品』(一九二五)
(10) 『主廊』
(11) 『ペテルブルク年代記』
(12) V・ベレヴェルゼフ『F・M・ドストイェフスキー』(一九二五)